

つながりあうことうら

第5号 2007.3.30 発行：琴浦町同和教育推進協議会



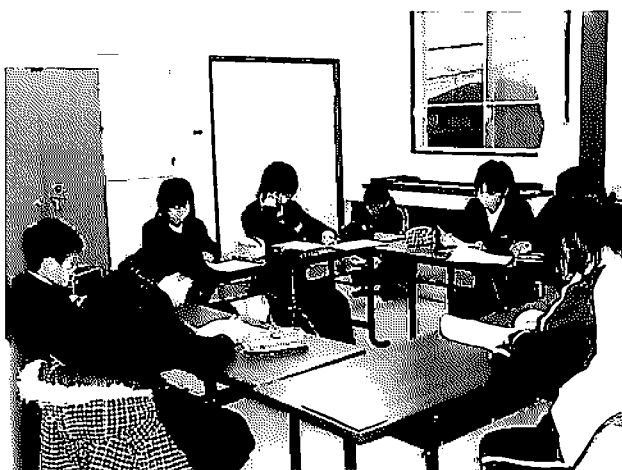
部落解放文化祭 浦安小学校5・6年生学習会で学んだこと「学習会の1年の歩み」の一場面

第31回部落解放文化祭 (2～3面)

解放教育講演会 (4面)

行政部会研修／
部落解放研究第40回全国集会、
第21回人権啓発研究集会参加報告
(5面)

小学校6年生交流学習会 (6～7面)



自ら進んで参加する取り組みをしよう

学習会発表他

東伯文化センターでは、二月一七日〜二〇日までの四日間、誰もがかけがえない大切な存在であり、他者の命・人権を尊重し、部落差別をはじめ、あらゆる差別を許さない地域社会を創造していくことを目的に部落解放文化祭を開催しました。

第31回部落解放文化祭



期間中は、一七〇〇人の方の参加があり、多くの人と人との出会いがあり、つながる喜びを感じ、交流の輪を広げることができました。

オープニングは、ほのぼのとした温かい雰囲気の中、五歳児親子による歌と手話「スマイル」で始まり、続く小学四〜六年生による「ソーラン節」の踊りでは、力強い姿に拍手がいつぱいでした。「今まで、一人で行動するのがとても不安で、クラスでも自分の意見を言えなかつた私でしたが、今は、自分の意見を言えるようになりました。こんな風に変われたのは、学習会のおかげです。みんながいるから不安じゃないと思えるようになったし、学習会でいろんな勉強をして、とても楽しいです。」(小学生学習会より)

自分たちの生まれた部落に誇りをもって生きていきたいという力強い言葉が会場に伝わりました。また、東伯中学校区の「同和」保育推進連絡会の保育士さんは『みんなが大切な仲間であり一人ひとりを大切にしよう』という言葉を人形劇を通して伝えて下さいました。



参加者の感想

今年何年かぶりに来て、小・中学生の発表を聞ききました。発表を通して感じたことは、自分の事ばかり考えず、もつと相手の事を考え、自分の身に

置き換え、お互いが大切にし合える社会にしなければいけないと思えました。そして、私と同じ様な気持ちになれた人が沢山いると、もつといい社会になると思うし、私たち大人がもう一度部落解放や、いろいろな差別について、勉強する必要があります。と、強く思いました。(二十代女性の方より)

団結おにぎりと豚汁の会食

団結おにぎりや豚汁は解放女性部のみなさんが前日の夜から、材料の切り込み、そして、当日は早朝より仕込みをされます。準備はとても大変ですが、みんなが団結して部落解放をとの願いが込められています。「おいしい」「寒い時期に豚汁が心にしみる」などと皆さんが喜んで食べてくださいました。

集団参観

東伯中学校区の保育園・幼稚園・小学校・中学校の参観を二日間しています。各展示に込められた願いや思いにふれることで、自分たちがこれまで積み重ねてきた人権学習を振り返るとともに、多くの人が差別解消に向けて取り組んでいることに気づく機会になります。

いろいろな催し

☆浦安保育園のあつたかバザー☆「しもいせ保護者クラブ」のどら焼き☆あじさい教室のクッキー販売☆下伊勢三区の方によるもちつきともちのサービス☆ゆず茶のサービス等があり皆さんに喜んでいただき、参加された方に温かい思いが伝わりました。



夜のつどい

夜のつどいでは、恒例の光太鼓、民踊、町職員労働組合の皆さんによるピンゴゲーム。

そして今回の出演に、高校生によるバンド演奏、二十代の女性によるヒップホップがあり、躍動感と若さあふれるステージになりました。この若い力が解放文化祭の活力の源につながってほしいと願っています。

町寿大学共催

講演会

「笑う顔には福来る」

講師 藤井輝明さん

(鳥取大学医学部教授)

私の右目周辺にある大きなアザは海綿状血管腫という病気でできたもの。百万人に一人の割合で発症する良性の腫瘍。そのせいで小学校時代からいじめられ、ばかにされ、傷つき、脅かされてきた。就職試験の際には、五十社の企業を受けたものの、成績は優秀だったが、外見で判断され、全部不採用だった。

私を罵倒した人は、この病気に対して何の知識もない人。学ばなければ、噂やデマに惑わされ、その噂を聞いた人が次にまたデマを流していく。噂やデマを信じることなく正しいことを知り、正し

いことを伝えていくことが大切である。

人は生まれる場所、国や地域、親を選ぶことは出来ない。部落差別と同じであり、本人が悪いわけではなく、自分自身ではどうすることもできない理由で差別される。だからこそ小さい時から家庭や学校でしっかりと教え、真実を見極める力を育てていく学習がとても大切である。

自尊心は誰にでもある。人からいじめられたり、否定されると、自己肯定観がなくなり、何をやる気もなくなってしまう。人にとって居場所があるということは、生きていく力につながる。私の居場所は家庭だった。両親がたくさんの愛情をもつて育ててくれた。『世の中の人々が全部反対しても、私たちは、おまえの味方だよ』という強い励まし

があつた。生まれてきた以上、その人にしかない価値、魅力があり、その人にしかできない仕事、役割が必ずある。誰一人として不用な人はいない。「あなたにしかできない事がある」と言ってくれた母。勇気をもつて一歩前に踏み出してくれた両親に感謝している。教育でもっとも大切なことは愛だと思ふ。

自分自身の心の中にある弱さ、たとえば見て見ぬふりをするとか、「私は知らん」「僕関係ないもん」「自分は、見た目が悪い病気でなくてよかった」などと傍観者でいること、これが一番世の中での差別、偏見、蔑視、中傷というものを助長させることになる。

一人ひとりの違いに対し排除や無視をするのではなく、「みんなと同じ仲間。一人ひとり違いが

あつていい。その違いは個性ですばらしいもの」と受け止める教育は本当に大事だと思う。

私は人間の社会でつくりだしたものは、人間の力によつて解決していくことができると思ふ。見た目ではわからない差別の苦しみに気づいてほしい。だから私は、弱い立場の人に寄り添いながら、差別の苦しみを伝える使命があり、県内外いろいろな所に出かけて講演を通して伝えていく。

広報紙第4号(前号)に次のとおり間違いがありました。訂正してお詫びします。

<訂正箇所>

4ページ あかさき部落解放文化祭のみだし
(誤)部落差別の (正)部落解放への

7ページ 5段目の8行目
(誤)破壊 (正)破戒

解放教育講演会

「差別意識に振り回されないうために」

講師 八木晃介さん(花園大学)

とき 二月二十三日

ところ 赤崎文化センター

はじめに

私は十九歳で被差別部落との出会いがある。いい出会いがあったから、部落問題と向きあえた。

現在は、人権教育研究委員会にいる。また人権教育研究センターにおいて、余暇はフィールドワークを重視し、学生と共に深夜二時間救援活動をしている。

差別は暴力である

一 言葉の暴力(存在否定、差別落書きなど)

二 関係の暴力(やりとりを避ける)

三 身体の暴力(チマチヨゴリを破る、朝鮮人虐殺など)

「差別はあの人たちの問題」という意識



昔から差別というのとは自分と無関係な問題だ

「自分と無関係な問題だ」というとらえ方が強いように思うが、その場合に二通りあったと思う。差別は「あの人たち」の問題で「あの人たち」に属さない私たちの問題ではないという発想。あの人たちは誰かというと第一番目は差別される少数の気の毒な「あの人たち」であり、「それは私ではない」ということ。

第二は、差別する愚劣

きわまりない少数の「あの人たち」の問題であり、私は差別しないという

らえ方で大多数の人たちは、「私は差別をしないし、差別されない」というところから、この問題はあの人たちの問題ということになっている。

この場合、差別しない、差別されない「わたし」とは何者であるのかの議論、それ自体の教育が決定的に不足していたか、不在していたのではないかと思う。それは「差別をする人の見方。考えかたにする。つまり他者でなく、軽薄に差別を許している私、その者だ。」

態度(偏見)と行動(差別)との不一致の原因

人は「他者との関係性」によって差別的にも反差別的にもなりうる。ちゃんとした人ときあつていけば差別をしない。どういう集団かによって違ってくる。問題があつても関係が壊れるのをおそ

れて注意できない場合もあるが、言うべき時にちやんと言うことができると。言える環境かどうかの問題である。差別は排除の観念形態である。



部落史の見直し作業の社会学的なインパクト 被差別側の置かれた条件とは無関係に差別してしまう差別側が、いかにすれば差別せずに生きられるか、またそのためにはいかなる人間関係の組み直しが必要か。

差別はする側の問題であつて、差別しないですむにはどういふ人間関係をつくっていかばいいのかが課題となる。

人権感覚の文化性

一 人間は育てられる中で差別をする存在になる。その弱さ・醜さか

ら自由な人間はいない。二 日常の中で、差別や不合理との対峙を回避する時、さらに弱く醜い人間になる。

三 日常の中で差別や不合理的に遭遇したとき、異議申し立てをするところから、自らの差別との闘いがはじまる。

四 異議申し立てが当然のこととして是認される社会が、人権文化社会であり、それは必ずしも差別のない社会ではない。

差別意識を止められる力をつけるには学んでいくことが大事であり、人としてのぬくもりが感じられる関係が解放となる。排除を一切なくすのはむつかしい面もあると思うが許さない行動を起していくことが肝要になる。常に願いを持つてたかう生き方こそ可能にできる未来がある。

琴浦町役場

職場内職員同和教育研修の取り組み

琴浦町役場では、職場内職員同和教育研修を毎年度各職域区分から十六名の同和教育推進委員を選任し、委員会によって研修計画を決定しています。

これは、行政職員としての責務を自覚し、部落問題の正しい理解と認識を深め、問題解決に主体的に取り組む意欲と実践力を身につけるとともに、事業や施策に直接対応できる職員をめざす。さらに人権尊重のまちづくりに向け、自らの人権感覚を高め、地域の推進に努めることを目的に行います。

平成十七年度は、「差別事象から学ぶ」をテーマに、万一、差別発言・差別落書きなどの差別事象が発生した場合、町職員

として迅速で適切な対応が図られるよう、一層自らの研修を深めるとともに、差別事象の再発を防止するための教育・啓発に努めることを設定理由として、実際に身近で起きた差別事件を取り上げて研修を行いました。

平成十八年度は、「琴浦町の更なる人権・同和教育の推進にむけて」をテーマに、地域住民に対して指導的立場にある行政職員として、同和対策審議会の答申や町の同和対策事業の取り組みなどについて研修し、地域での同和教育の推進に資することを設定理由として、

琴浦町で合併前から取り組んできた同和対策事業の意義などについて学習しました。

研修は年五回、各文化

センターを会場として行い、全職員の参加を義務付けています。

また、この全体研修とは別に、各所属(課)内研修を年一回以上実施しま

全国集会の参加報告

部落解放研究第四〇回

全国集会に参加して

人権教育推進員

福本貴佐枝さん

「条例・宣言」制定運動は、部落解放基本法制定運動の一環として提起されてきたが、決してこれに従うものでなく、「地方における基本法闘争」としての独自の意義をもっています。

差別問題は、抽象的に存在するのでなく、日常生活の場である地域共同体の中にあります。部落差別の問題が、歴史的にも地域共同体との関係で形成・維持されてきた

す。さらに町内で実施される研修等には、積極的に参加し、推進者としての役割が果たせるよう努めています。

側面をもつていて、今日

もなおイエ意識やケガレ意識などに基づく差別的な慣習やシステムが、差別を温存・助長させていることを考えれば、具体的な差別をなくす課題を一つ一つ地域共同体の中から解決していく取り組みは、きわめて重要なこととです。地域共同体の差別的な体質・土壌を具体的に改革していく「人権のまちづくり」運動が解放運動にとって大きな意義を持つのは、地域に残っている差別的な体質・土壌を具体的に改革していくからです。

人権啓発研究会に

参加して

浦安保育園 河上寛子さん

テレビ・新聞などメディアについての話を聞きました。知らない情報を得る事が出来るメディアですが、良し悪しに関わらず、子どもたちが、すぐに模倣したり、不確かな情報を信じて先入観をもつてしまい、意識化されてしまう恐れや影響力もあると思います。何回となく見たり聞いたりするうちに、違和感なく全てもうであると思ってしまうところもあります。

「事実と真実は違う」又「いつでもどこでも嘘は、見抜く事が出来る」と講師の方が言われました。情報を正しく伝える様にしていき「この事は、どうかかな?本当かな?」と見ていく事が出来る力をつけていきたいと思えます。

赤崎中学校区6年生

同和教育交流学習会

二〇〇七年二月一日、赤崎文化センターにおいて、「自分の生活をふり返り、部落差別をはじめとするあらゆる差別を許さない仲間になるためにどう行動するか、自分の思いを伝え合う」のねらいのもと、全体会では、お二人の方にミニ講演をしていただきました。その後の分散会では、各校で取り組んできた同和教育を通して学んだことを、自分の思いを出しながら話し合うことができました。

一人一人が自分の持っている力を十分に伸ばし、夢や目標に近づける中学校にしたいと思います。「人を大切にするこ

がそのための基本です。それは、まず自分が精一杯前向きに取り組むこと。そして、頑張っている人を尊敬し、もしも頑張れていない人がいたら、その理由を考える想像力を持つことです。目に見える物事の背後にあるものを「思いやる」心を大切にしてほしいと思います。

「人を大切にするこ

〈ミニ講演会〉

赤崎中学校教頭

鳥山秀穂さんのお話

皆さんの入学を楽しみに待っています。皆さん

町人権教育推進員

福本貴佐枝さんのお話

皆さんに伝えたいことは、「一球一球、一歩一歩の積み重ね、その上に咲く花、積み重ねたときに熟す実、それは、美しく尊く真の光を放つ」ということです。一分の時間を大切にすることが、自分を大切にする生き方です。人とのつながりもひと言掛け合うことから始まります。

人の命は尊い。自分にも、友だちにも命は一つしかない大切なものです。荊冠旗の内のトゲを意識し、人を傷付けてしまつたら、自分を問いながら反省できる人であつてほしいと願っています。

〈児童の感想〉

○ 他の学校の仲間の考えを聞いて、みんなが「差別をなくしたい」という気持ちを持っていること



が分かりました。一人だけではできないことも、みんなで力を合わせるとできる。「差別は絶対いけないこと」という思いを他の人にも伝えていきたいです。みんなが自分の思いをしつかり持つていて心強かったです。

○ 鳥山教頭先生、福本貴佐枝さんの話を聞き、中学校に向けてのことや一歩一歩の大切さ、命の大切さが分かりました。わたしは、部落差別のことを家族と話していなかつたし、行動していなかつたので、これからは「わくわくの勉強」やこの学習のことを家族に伝えようと思います。そして部

落差別を許さないように、自分が思ったことを家族や仲間にとんどん伝えていきたいと思っています。

○ 交流学習会では、第一分散会で話し合いました。「差別は、する人・される人の問題ではなく、一人ひとりの問題です」という思いを聞きました。わたしもその人と同じ意見でした。差別やいじめに対し、見て見ぬふりをせず、正していくことが大事だと思いました。

○ 今まで、たくさんの交流学習会をしました。その中でも今回の交流学習会は、とても参考になりました。みんなの意見を聞き、自分の意見も発表しました。これからの目標を持つこともできました。中学、高校、社会に出て、同和教育は大切なことだから、この交流学習会を活かしていきます。

東伯中学校区6年生 人権・同和教育現地交流学習会

東伯中学校区の四つの小学校の六年生が、東伯文化センターに集い、人権・同和教育で積み上げてきたことを出し合い交流しました。各校で取り組んできた学習を通して、考え実践してきたことを、自分の思いを交えて出し合うことができました。

染め一揆「水平社創立」の学習を通して、優しさや勇気、団結、人々の努力や強さを知ることができました。

○ゲストティーチャーの方の話聞いて、いろいろな人の協力や支えで今の自分があることを知った。一人ではない、自分を語ることによって、人は振り向いてくれる。黙っていてもダメだ。まず自分から行動することが大切だとわかりました。変わってきた自分について○相手のことを考えて生活できるようになってきました。

グループの話
学習して心に残っていること
○「菜の花」「山の粥」「渋

○人を大切にしている心が育ってきたと感じています。
○身のまわりの差別や、自分の心の中を見直すことができるようになって

きました。

○恥ずかしがらずに、思ったことを堂々と発表できるようになってきた。
○腹が立つたらすぐ仕返しをしたりしていたことがあったが、感情を抑え行動することができるようになってきました。

保護者の講話

和井美鈴さん

今日は、六年生の皆さんの学習を見て、親として感じたこと、皆さんへの願いをお話したいと思います。

十二月、他の保護者の方と一緒に「自らが置かれていた社会的立場の自覚を深める学習」を参観させていただきました。その時の六年生の姿を見て、心の成長を感じる事ができ、とてもうれしく思うと同時に、学習を続けていくことの大切さを改めて感じました。

学習を通して子どもたち

ちは自分の心の中を見つめ、その中にあるくもりめがねや差別の芽、心の弱さに気づき反省しました。そして、そこから自分がどうあるべきか一生懸命考え行動にも表そうとしてきたように思います。「六年生になって、クラスのみんなが変わってきた。頼もしくなってきた。」といった声が聞かれるようになりました。確かに四十二・一九五キロメートルのフルマラソンリレーを行った時も、一人一人のタイムに差があってもクラス全員で記録を伸ばそうと気持ちを一つにして走っていました。ここには、思いやりの心と一人一人の違いを認め合う心があったのではないかと思います。

また、「心のノート」を読んでみると学習内容の他に自分の気持ちや考

えが書き込まれていて驚きました。六年生で初めて学習した部落問題について、このノートのおかげで娘と話し合うきっかけになってよかったです。

このノートは子どもと先生、そして保護者をつなぐ大切なものであり、子どもの心の記録でもあると思います。人権学習を通して大きく成長したことを本当にうれしく思います。これからみなさんは、中学校という新しい環境の中で友だちも変わっていくと思いますが、周りに流されたい強心でいてほしいと願っています。もちろん課題となることはまだまだあると思いますが、親として私たちは、これから子どものあるまの姿を受け止め、一緒に笑い、一緒に悩みながらいつまでも支えになっていきいと思います。

共に自らを語りあう

★今回は、共に自らを語り合い、仲間の思いをしっかりと受けとめあうことの大切さについて学びます。

これまで、同和教育では、自尊感情を育み、共に自らを語り合い仲間の思いを受けとめあうことの大切さを学んできました。そして、仲間の思いに気づき寄り添いあえる関係を築いてきました。また、一人ひとりの思いを大切に、その思いを実現するための取り組みを行ってきました。

わたしたちは、その学びを通して、一人ひとりを大切にできる自分、差別を許さない自分へ、自らの生き方を変えてきています。また、寄り添いあえる仲間との関りによって、自分を変えられているのです。

「わたしたちはどのように変わってきているのか」

わたしたちの日常で、こんな変化が表れていませんか。

●自らの思いを語るができる。本音で語り合い、相手の思いを受けとめあうことで、分かりあい、つながりあうことができる。

○日常生活の中で、また同和教育部落懇談会など多くの人の前でも、自らの思い、生き方を伝えることができます。

○自分の生まれたふるさとに誇りを持ち自分を語れる生き方ができるようになっていきます。

○自分の思いを伝えることのできる喜びを実感しています。

○自分の弱い部分をさらけだし、その思いを本気で受けとめる人との出会いがあるなど、他の人との新しい関係を築くことができます。

○自らを語ることで、行動できる自分へ変わってきています。

●自分が人を決めつけて見ていることや、自らの差別意識に気づき、改めることができる。

相手の思いが分からないと、人を一面的に決めつけてしまうことがあります。自分で確かめもせず周囲の意見に流されるのではなく、相手の思いを受けとめ、理解するようになっています。

また他の人の思いや考え方を聴くことで自らの差別意識に気づくことができます。

例

足が不自由だからといって、気の毒だと言ってほしくない。



なぜ怒ってるか分からなかった。自分には差別意識があり、気づかない内に人を傷つけていることが分かった。そんな自分を変える必要がある。



●相手の思いを受けとめ、寄り添いあえる。

自分にはどんなことができるか、自分はどうあるべきかを考え行動できるようになっています。

例

できないと決めつけないで。私はパソコンを学び、生きがいにする。自分で年賀状を作り、孫に送りたい。



祖父

パソコンに対する思いや、僕に「高齢者には無理」という間違った考えがあったことが分かった。求められれば、僕が教えられることは教えるし、研修会には車で送迎するよ。



父

●問題解決のために話し合い、行動できる。



地域や家庭、職場などで自分が思っている問題点を出し合い共通認識し、改善するために行動できるようになっています。

共に考え、共に解決していこうとする仲間のすばらしさや、話し合うことで、自分たちの力で現実を変えることができるすばらしさを実感しています。

そのことが人権を基軸にした安全で安心して暮らせるまちづくりにつながります。

●差別を許さない生き方を明確にする。

一人ひとりが大切にされていない現実気づき、差別を許さない思いが仲間と共有できます。差別を許している自分に気づき、そんな自分を許さず、自分を変えることができるようになっていきます。また、周りの人たちの差別意識や、身近な生活の中の間違いやおかしいことに気づき、そんな現実を変えるように、仲間とともに行動できるようになってきています。